

島根県立
古代出雲歴史博物館
NEWS

2009.DEC vol. 12



CONTENTS

- 2・3 企画展「島根の神楽」特集
- 4 学芸員通信 5 出雲大社巨大柱の発見から10年
- 6 古代文化センターだより 7 山陰歴史回廊 ほか
- 8 企画展スケジュール／イベント・行事案内

隱岐 石見 出雲

神楽

島根の
KAGURA

企画展

芸能と祭儀

2010年 2.5(金) ⇒ 4.4(日)

企画展

島根の神楽

— 芸能と祭儀 —

島根県は全国でも有数の神楽どころです。県内の民俗芸能のうち、圧倒的な数量を誇っているのも「神楽」であり、そこに暮らす人々が神楽の舞に寄せる親しみは大変に深いものがあります。島根県内の神楽を分類すると出雲・石見・隠岐の旧国ごとに特色ある神楽が分布していて、各々独自の風格を持っています。その一方で県外にも目を広げて見ると、「島根の神楽」は中国地方の神楽の一角として、近隣県の神楽と共通した基盤を備えているのも確かなことです。

これら島根県内の神楽について、各国ごとにこだわり、また県外とも比較しながら、ご紹介していきたいと思います。



会期

平成22年
2月5日(金) ▶ 4月4日(日)

会場

島根県立古代出雲歴史博物館
特別展示室

主催

島根県立古代出雲歴史博物館・島根県古代文化センター

後援

朝日新聞松江総局、毎日新聞松江支局、読売新聞松江支局、産経新聞松江支局、中国新聞社、山陰中央新報社、新日本海新聞社、島根日日新聞社、NHK松江放送局、BSS山陰放送、日本海テレビ、山陰中央テレビジョン、エフエム山陰、山陰ケーブルビジョン株式会社、出雲ケーブルビジョン株式会社、ひらたCATV株式会社

展示構成

プロローグ

神楽への招待

第1部 県内三国の神楽世界

第1章 石見の神楽

第2章 出雲の神楽

第3章 隠岐の神楽

第2部 神楽の諸相

第1章 様々な八岐大蛇

第2章 荒平の系譜

第3章 浄土神楽の痕跡

第4章 神楽に現れる墓蛇

エピローグ

神の声を聞く一託宣

プロローグ

神楽への招待

島根県内における数多くの神楽団体の分布を地図で示すとともに、「神楽」という芸能の成り立ちと変遷について大まかな説明を行います。

関連講座

2月13日(土)

「企画展『島根の神楽』への招待」

当館 専門研究員 中上 明

3月6日(土)

「中国地方の神楽と神がかり」

民俗芸能学会代表理事 山路興造氏

〔場所〕 古代出雲歴史博物館講義室

〔時間〕 各回とも13:30~15:00

〔定員〕 100名〔参加費〕 無料

〔申込〕 電話、FAX、ホームページのイベント参加フォームにて受付。定員になり次第締切とさせていただきます。

演舞イベント

〔第1回〕 2月21日(日) 13:00~16:45

阿刀神楽 (広島市安佐南区)・有福神楽 (浜田市)

大社文化プレイスうらら館にて〔定員600名・無料〕

〔第2回〕 3月21日(日)

大土地神楽 (出雲市) 当館 風土記の庭にて

〔第3回〕 3月22日(祝)

赤塚神楽 (出雲市) 当館 風土記の庭にて

〔第4回〕 3月28日(日)

島前神楽 (隠岐郡島前) 当館 風土記の庭にて

お問い合わせ先／島根県立古代出雲歴史博物館

〒699-0701 島根県出雲市大社町杵築東99-4 TEL 0853-53-8600 FAX 0853-53-5350

第1部

県内三国の神楽世界

ここでは、県内の旧三国ごとに神楽世界の特色を表現します。

■第1章 石見の神楽

石見神楽は随所に修験的な遺風を残しています。最初に採物舞を数番行い、次いで着面の神楽能に入ります。華やかな神楽能の区切れにはまた採物舞が入り、最後は「五郎の王子」で終わります。奉納神楽の拡大バージョンというべき式年の大元神楽については、その舞台を再現します。



井野神楽「鍾馗」

■第2章 出雲の神楽

出雲神楽は、はじめに「七座神事」と呼ばれる採物舞をまとめて行い、それが終わると神楽能が連続して続きます。神楽能の始めには出雲神楽独特の「式三番」の段が入ります。採物舞と神楽能とは明確に区別され、最後は「日御碕」で終わる風習があります。



佐陀神能「大社」

■第3章 隠岐の神楽

隠岐神楽では、本格式な祈祷神楽とその略式の奉納神楽の二種類がありました。神楽の全体は、最初に採物舞があって続いて神楽能、また最後に採物舞で終わるという構成になっています。隠岐神楽では今も巫女が重要な役割を担っているのが特色といえましょう。



島後久見神楽「先払」

第2部

神楽の諸相

神楽の特徴ある要素について、島根近隣の神楽も含めて特集展示していきます。

■第1章 様々な八岐大蛇

花形演目の「大蛇退治」。島根県内では様々な形態の八岐大蛇が演じられています。石見神楽の提灯蛇胴の大蛇、奥飯石神楽の幕蛇、出雲神楽一般のトカゲ蛇、佐陀神能の立ち大蛇、島前神楽の座り大蛇、これらを一堂に展示します。



奥飯石神楽の幕蛇

■第2章 荒平の系譜

「**荒**平」は安芸十二神祇に登場する鬼で、その舞は天正年間の神楽台本にもある最古級の神楽能です。この「荒平舞」は変容しながらも今も出雲・石見の神楽の中に存在しています。中国地方に渡る「荒平」の様々な有り様を紹介します。

■第3章 浄土神楽の痕跡

中国地方ではかつては死者の霊を昇天させるための神楽が行われていました。今では想像しがたいこうした「浄土神楽」について、文字史料を主に紹介します。

■第4章 神楽に現れる藁蛇

中国地方の大きな神楽には、藁で作った竜蛇がしばしば登場します。島根県内には大元神楽と抜月神楽に現れますが、広島県の神楽とも合わせて展示します。



神木に巻かれた大元神楽の藁蛇と幣類

エピローグ

神の声聞く—託宣

神懸かりして託宣を伺うことは神楽祭祀の核心でした。島根県内では大元神楽と大原神職神楽に今も保持されており、これら二様の神懸かりと託宣の様を迫真の映像で紹介いたします。

「発見 日本最古の旧石器」

— 出雲市多伎町・砂原遺跡^{すなぼら}発掘速報展 —

古代出雲歴史博物館 主任学芸員 深田 浩

今年の9月末、テレビや新聞誌上を揺るがす世紀の大発見が、当館のすぐ近くでありました。まさに平成21年の重大ニュースにも必ずや登場する(かもしれない)このニュースとは、出雲市多伎町・砂原遺跡における日本最古の旧石器の発見でした。

砂原遺跡の調査は、出雲市在住の自然地理学者である成瀬敏郎氏が、出雲市多伎町の海成段丘の断面から玉髓製の石片を偶然発見したことから始まりました。この石片を鑑定した同志社大学の松藤和人教授(旧石器考古学)により、石器の可能性が高いことが判明し、砂原遺跡学術発掘調査団(団長:松藤教授)による発掘調査が行われました。この調査により、石器類は約12万年前の地層から出土したことが明らかとなったのです。これまで日本最古の旧石器は4~7万年前とされてきましたが、この発見により列島における人類の痕跡が一気に数万年も遡る可能性がでてきました。

この発見を受け古代出雲歴史博物館では、調査団のご協力を得て、発見された旧石器を“速報展”というかたちで展示・公開を行いました。展示は10月10日から25日までの、わずか16日間という短い期間でしたが、8,000人を超える多くの方が見学に訪れました。

この旧石器は現在、科学的な検証作業が慎重に進められており、全国の研究者もその動向を見守っています。旧石器の評価が定まるのはもう少し先のことと思われませんが、日本列島における人類の起源を解明する上で、まさにこの出雲の地が熱い注目を集めているのです。



発見された旧石器



「中国青磁の優品 約40年振りの里帰り」

— 出雲市荻苺町^{おぎとち}・荻苺古墓の出土品公開中 —

古代出雲歴史博物館 主任学芸員 深田 浩

今から44年前の昭和40(1965)年4月、斐伊川西岸の荻苺町では、田んぼの区画整理が行われていました。通称“馬捨場”と呼ばれる元々荒地だった一角を地元の方が掘り返したところ、おびただしい数の小石が見つかり、その下にはなんと石で蓋をした大きな甕^{かめ}が埋められていました。さらにその甕の中からは、青磁碗2口、青磁皿1枚や骨片が見つかったそうです。付近からは石塔も出土したといえます。

まるでおとぎ話のようなお話ですが、これが荻苺古墓発見のてん末です。見つかった青磁碗・皿は中国・南宋時代の窯で焼かれたもので、保存状態も良く、日本で出土した中国青磁の中でも極上の優品です。また、甕も口径50cm、高さ約90cmの大型品で、およそ13世紀の鎌倉時代に、愛知県^{とこなめ}の常滑古窯で焼かれた可能性が高いものです。この遺跡は、出土品や発見の様子から、輸入青磁を手に入れることができる、まさに地元の有力者の墓であったに違いありません。



青磁碗



これらの出土品は翌年には国の所有物となり、昭和55(1980)年には重要文化財に指定されました。現在は奈良国立博物館で収蔵されていますが、奈良博と当館の収蔵品の相互貸借により、出雲の地に発見以来となる初めての里帰り展示が実現しました。常設展・テーマ別展示室にて公開中ですが、展示期間は2010年の2月15日までですので、まだ間に合うと思って見逃すことがないよう、お早めにご覧ください。

なお、現地は水田となっており、発見当時の面影は残っていませんが、付近の墓地には出土した石塔が1基移築されています。

出雲大社巨大柱の発見から10年

古代出雲歴史博物館 学芸部長 松本岩雄

出雲大社の宮司家には、『^{かなわのごぞうえいさしず}金輪御造営差図』(以下、金輪図と記す)という古い図面が伝えられている。神殿を構成する9本柱は3本ずつの材を金輪で束ねて1本の柱として描かれており、建築史の常識からみると異例のもの。しかもその柱の直径は1丈(約3m)、階段の長さは1町(約109m)と記され、尋常な規模ではないことから単なる想像・理想上の伝承図と言われてきた。

今から100年前、明治41年(1908)から翌年にかけて、出雲大社本殿の高さをめぐって、建築学者の伊東忠太博士と歴史学者の山本^{のぶ}信哉博士の論争があった。伊東博士が「32丈や16丈の建築があったはずがない、金輪図は馬鹿馬鹿しいもの」といったことに反発し、山本博士は「32丈はないにしても16丈はありうる」と考えた。山本博士は東大寺大仏殿の高さが15丈6尺であることから、『^{くちずさみ}口遊』(970年)の解釈を踏まえて16丈が穏当であるとしたのである。

その後、建築学者の福山敏男博士が昭和11年(1936)に高さ16丈の本殿復元図を作成したものの、賛意を表す学者は皆無であった。そして長い間、金輪図は建築史・歴史学の^{そじょう}俎上^{にわか}にのることはなかった。

平成11年(1999)9月、祭礼準備室建設に先立って出雲大社境内遺跡の発掘調査が開始された。翌年2月になると幅3m、長さ4m以上におよぶ^{れきん}礫群^{にわか}が2列現れてきた。一見排水溝のようにも見えるが、地形の低い南側が途切れているので溝ではない。これまで見たこともない奇怪な遺構である。発見された場所が境内地であることを考慮すれば神社建築に関わる遺構の可能性が高いと思われたので、二つの礫群の間隔を測ってみると約6m。とすれば宮司家に伝わる「金輪図」に描かれた柱の間隔に近いではないか。俄にこの礫群は本殿の柱穴に詰められた石の可能性が高いのではないかということになり、この地区を集中的に調査した。

ついに現地表面から1.4m掘り下げた地点で、直径約1.3mのスギ材を3本束ねにした巨大な柱が出現し、調査に携わった者一同は^{きょうがく}驚愕した。出土状況は「金輪図」に描かれたものにきわめて近い。平成12年(2000)4月5日のことであった。



2000年2月に現れた2列の奇妙な礫群



中央ロビーに展示された宇豆柱。「この柱を見るためにははるばる訪れた」という人も多く、観覧者の興味を掻き立てる柱の存在感はきわめて大きい。



巨大柱の出現(2000年4月)



長蛇の列になった巨大柱の一般公開(2000年5月)

復元・再現！天平のおもてなし体験ワークショップ

古代文化センター 専門研究員 森田 喜久男



完成した天平のおもてなし料理

ただいま開催中の企画展「出雲国誕生と奈良の都」にあわせ、古代食復元イベントを実施しました。古代食を復元するという試みは、すでに奈良県の飛鳥資料館や鳥取県の因幡万葉歴史館などにおいて行われています。そこでは、天平文化華やかかなりし頃の貴族や国司の宴会の場面があざやかに再現されています。それと同じことをやってもつまらないというわけで、私たちはあるストーリーを思いつきました。それは、出雲の国司が、国内を巡行する過程で、島根郡の郡司の邸宅に立ち寄ったとすると、そこで、郡司からどのようなおもてなしを受けるのか…。

多分、島根郡の特産物が国司の前に料理されて出されるだろう。その場面を再現してみよう。

まずは、『出雲国風土記』を丹念に読む作業から始めました。また、『古事記』の神話の中にも何か手掛かりはないのか探しました。その結果、国譲り神話の場面で大国主神が高天原の使者をもてなした際にスズキが使われていることが判明。中海の大根島はかつてはタコ島と呼ばれていたことから、タコが島根郡の特産物として浮上。さらに、特産物の十六島のノリも『出雲国風土記』に楯縫郡の「紫菜」として登場。「尤も優れり」という具合に珍重されていたことがわかりました。これらをメインディッシュやお吸い物にして、固めのご飯や干し柿・蘇などのデザートを用意すれば一丁あがり！ なーんて楽天的に考えていたら、そこからが大変。どうやって料理したんだろう？

手がかりは、平城京から出ている木簡と平安時代の儀式書。スズキの料理方法については、「楚割」といった表現が木簡に見えるので、塩干しにして細かく割いたのだらうと推測しました。タコについては、『厨事部類記』という院政期の料理書から、茹でてから火であぶって削ったものと判断しました。

このように私たちが手探りで断片的に考えついたことを、老舗旅館竹野屋の総料理長（現顧問）を務めてこられた安田政男氏に恐る恐るお話すると、氏は長年の経験と料理人としてのカンを活かして、素晴らしい料理に仕上げてくださいました。

器は土師器と漆椀。土師器の方は、長年、隠岐の西ノ島で考古学をやりながら陶芸の道にいそしんでこられた柚原恒平氏の作。

学芸員という仕事のメリットは、さまざまな職種の方とのコラボレーションができることです。今回もこのイベントを通して、料理人と陶芸家の卓越した技を拝見できました。さらに、古代食の復元研究を通して、食に関わる多くのデータを蓄積できたのです。

出来上がった古代食のお味の程は…。うーん、予想はしていましたが、少々しょっぱいです。でも、ムフフフ…私のような日本酒大好き人間には、たまらない味でした！



[TOPICS]

2009年の秋まつりは 11月3日 博物館の文化祭一っ！

「企画展の予習・復習」と「交流・体験・発表会」をテーマに、博物館らしい企画により楽しい秋の一日となりました。



◀「むかしものがたり館」
民話を語る会のみなさんによる各地に伝わる民話・昔話や学芸員による神話の語り「神語り」にみなさん聞き入りました。



▲「バイオリンと万葉集の語りと…」
開催中の企画展関連イベントは、国府にまつわる曲の演奏や、川島美美子氏による「恋の歌？それとも政治の歌？」と題した山陰に関わる万葉歌人についての興味深いライブトークで盛り上がりました。



「万葉学おでかけ講座」

～風土記の丘そして宍道湖自然館へ～

10月12日(月・祝)

八雲立つ風土記の丘

10月18日(日)

宍道湖自然館ゴビウス

この秋の企画展「出雲国誕生と奈良の都」では、21世紀の現代にまで影響力を持ち続ける奈良時代・出雲の地域特性を、領域支配や信仰の面などからご紹介しました。さらに「展覧会会場だけじゃもったいない！現代の風景や自然の中に息づく奈良時代を見つけに博物館を飛びだそう！」と、企画展や奈良時代ゆかりの地を訪ねる『万葉学 おでかけ講座』を関連イベントとして2回の講座を開催しました。

10月12日(月・祝)には、八雲立つ風土記の丘(松江市)を13名の参加者が訪れ、風土記植物園や復元奈良時代家屋を見学、展示学習館で解説を聞きながら出雲国誕生の象徴の地・出雲国府とその周辺の奈良時代の様子に思いをはせました。

また10月18日(日)には、宍道湖自然館ゴビウス(出雲市)へ出かけ、出雲国風土記に「入海^{いりうみ}」として登場する宍道湖の生き物観察をとおして、今もかわらぬ宍道湖の豊かさを体感しました。

どちらの講座も、参加された方はそれぞれの館のファンの方がほとんどでしたし、全面的にご協力下さった両館学芸員の方々の語り口や持ち芸(?)もそれぞれに特徴があり、いつもの古代出雲

歴博の講座とはひと味もふた味も違うよい機会となりました。講座のしめくりにはちゃっかり企画展のPRもさせていただきました。



◀投網をうつゴビウス学芸員の山口さん。ひとが水面によりそって暮らしてきたことを感じる光景でした。



風土記の丘・奈良時代復元家屋にてはとむぎ茶で一服「掘立柱建物の中ってこんなに広いんだ」



宍道湖のほとりにて「何がいるかな。いきもの探しに出発！」

好評でした!!

学芸員と行く『古代出雲かけめぐり隊』

古代出雲歴史博物館では、館内の展示だけに留まらず、春・秋まつり、博物館感謝デーなどのイベントを通して情報発信に心がけています。今年はさらに館外に飛び出して現地を見てやろうということで『古代出雲かけめぐり隊』と称して4つのコースを企画しました。

出雲ブランドの玉作りや国譲りの神々の足跡を辿り、加茂・荒神谷の陰に隠れた青銅器を訪ね、神迎え伝承の地を訪れる。普通の観光旅行では決して行程に組み込まれることのない、インターネットで調べても判らない、けれど知る人ぞ知る。そんな場所へ皆さんをご案内するべく計画しました。学芸員が同行し、現地だけでなく車内でも研究成果に基づいた説明がそれぞれの個性と共に行われ、4回の実施ながらリピーターの方も多く、また県外からの参加もあり注目いただいているのかと嬉しくも、緊張を伴ってご案内させていただきました。

このツアーの特色は車内での学芸員によるお話がある関係で、何台も車を連ねて行く訳にはいかずバス1台限定、それだけに濃い内容。目的地が民家と民家の間を縫って行った先の空き地だったり、山道を登って下って上った先だったり(この時は前日



斐伊川土手から古代景観を想像する(膳夫神社跡)

までの雨で足下が不安ではたしてご案内出来るのか心配しました。)で皆さんに長距離歩いて頂いたりもするので体力がいる…場合が多い。「〇〇ってなんて読むの?」「チラシを見ると△△と××の間でこの近くなんだけどな」と、まるでミステリーツアー。

古代出雲歴史博物館ならではの視点と気持ちがたっぷり詰まった日帰り旅行、次回はいつ開催されるか乞うご期待!!

『お正月の特集展』歳徳神を招く

吉兆幡勢揃い

’09年12月22日(火)ー’10年1月17日(日)

企画展
特別演舞

神に舞



安芸

石見

出雲

隠岐

企画展 島根の神楽
～芸能と祭儀～
平成22年2月5日(金)ー4月4日(日)

安芸十二神祇 石見
阿刀神楽と有福神楽

2月21日(日)午後1:00～午後4:45 / 無料
会場 / 大社文化プレイスうらら館だんだんホール

出雲 大土地神楽
3月21日(日) / 無料

出雲 赤塚神楽
3月22日(月・祝) / 無料

隠岐 隠岐島前神楽
3月28日(日) / 無料

会場 / 3月21日、22日、28日は
古代出雲歴史博物館風土記の庭特設ステージ

特別展

BATADEN

一畑電車100年ものがたり

2010.4.23.FRI → 7.4.SUN

※展覧会名は仮称です。変更になる場合もあります。

特別展

千家十職×みんなぱく(仮)

茶の湯のものづくりと世界のわざ

2010年 7月23日[金]ー9月20日[月]

※展覧会名は仮称です。変更になる場合もあります。

企画展

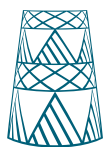
神を観 たてまつる(仮)

～神々のすがた・かたち～

2010年 10月8日(金)ー11月28日(日)

※展覧会名は仮称です。変更になる場合もあります。

発行 / 平成21年12月



島根県立古代出雲歴史博物館
Shimane Museum of Ancient Izumo

〒699-0701 島根県出雲市大社町杵築東99-4
TEL.0853-53-8600(代) FAX.0853-53-5350
URL: http://www.izm.ed.jp E-mail: contact@izm.ed.jp
開館時間 9:00～18:00(11月～2月は、9:00～17:00)



マスコットキャラクター
雲太くん



マスコットキャラクター
出雲ちゃん